

## ■学校経営のポイント

### マルつけと正解主義

喜名 朝博

1年生の子どもたちがノートをもって教卓の前に列を作っている。先生にマルをもらうためだ。なかなか順番が回ってこないので前後でおしゃべりが始まる。先生からマルをもらった子どもはニコニコしながら自席に戻って自由にしている。

こんな光景を見るたびに、実質的な学びの時間はどれくらい保障されているのだろうかと心配になる。

#### マルをもらうことを目指す子どもたち

教師がマルをつけ、子どもたちがマルをもらうという日本の学校の日常は、150年続いた学校文化かもしれない。しかし、これこそが正解主義の権化ではないだろうか。

「正解主義からの脱却」は、令和答申でも指摘された学校改善の最優先事項だ。テストで百点をとること、先生からマルをもらうことが勉強することだと子どもたちに思い込ませてしまっていないか。判断基準は常に教師にあり、他者から評価される場が学校だと思わせていないだろうか。

結果よりもその過程が大事と先生は言うが、最後はマルにならなければ評価されないことを子どもたちも知っている。だから、「早く答えを教えて」と、正解にこだわる子どもたちが多くなる。

#### 「✓」をつける欧米

欧米では「○」ではなく、正解に「✓」をつけるそうだ。合っていること、正解することに大きな意味はない。大事なことは、何が理解できていないか、なぜ不正解だったのかを確認することだ。100点をとったとしても、たまたまだったかもしれない。それで理解した気になってしまえば、復習の機会を失うことになる。

「✓」されなかったところから自分の学びが始まる。マルをもらうことが大切なのではなく、自分が分かっていることを明確にすることに価値がある。

学校の正解主義は、子どもたちから本当の学び、学びの楽しさを奪っているのだ。

#### 唯一の正解という誤解

マルつけは、子どもたちに「正解は一つである」という誤解を強化させることにもつながる。「○」か「✓」かで判断ができるのは、知識や技能の一部でしかない。計算の答えは一つかもしれないが、その答えの出し方は一つではない。

その意味でも、考えの道筋を問うことを大切にしていきたい。記憶の再生ではなく、どうしてそう考えたのかを問うことが大切だ。授業の中では「問い返し」によって思考の過程を想起させることができる。それをノートやワークシートに書かせて評価していくことで、その子の思考過程やつまづきが明らかになっていくはずだ。

そして、子どもたちが話し合うことを通して唯一の正解ではなく、その時点での最適解やその場の納得解を求めていく過程を大切にしたい。

#### 採点は誤答分析である

ところで、文科省の「学校・教師が担う業務に係る3分類」によると、マルつけは「教師の業務だが負担軽減が可能な業務」に分類されている。事実、スクールサポートスタッフに任せている担任もいる。

しかし、「○」なのか「✓」なのかは別として、これまで教師は、採点をしながら子どもたち一人ひとりの誤答を分析し、理解の状況を把握してきたはずだ。さらに、そこから自らの授業の在り方の省察にも及ぶ。

マルつけは他者でもできるが、誤答分析は教師にしかできない。それを手放してしまえば、子どもたちの理解の度合いがわからなくなるばかりか、授業改善の機会をも失ってしまうことになる。

(きな・ともひろ＝国士舘大学教授／全国連合小学校長会顧問)

## ● 2025・2026 今、子どもたちに伝えたい ●

### 入学式・卒業式の校長式辞 42 選

学校講話・メッセージ研究会【編集】 A5判／定価 2,530 円

■本の詳細の確認およびご注文は、右QRコードより小社ホームページをご利用ください。

